

雙魚堂瑣記

明治四十年十二月中澣起筆

特別

14

1919

224



雙魚中談記

十古阿三子人

〇との終骨董店 勇介を伴て少のを請す  
 此の家をより石川園崎(石川) 狹井(石川) 等  
 おおの家をよるも全う利り見しとて少のを心  
 加りて才印材数多顆と親く、此中一多顆  
 泥舟の私印二十餘顆材刻と其の旨也  
 其の跡をよるは錯摩し云々んことを惜也  
 購を以て名人のありし之を存する中  
 岡山方面の刻二顆 京都の刻六可下

刺園防共三顆揃あり刻ありあり七保存  
とありあり他は花印十数顆と辨小札中云  
く少人おきの磁印も未刻と鈕は反刻あ  
り也本獲易くささるる者も跡立印一  
白田印一皆の印也主人余の印をまゐりし切  
りさす感し其の末は骨をいへる事さす印  
道一と出し示す長さ尺二重んとし高き  
四寸五分許幅四寸五分許ケンボン式の  
蓋ありや五個の抽子あり外而して  
角の端ゆつと蓋の柄あり指細の彫りあり  
古名も揃りくし余一見魂心は強えし

泉樓印

刻をまをまを主人遊々流る地印道  
池田村之信(画家)の心花は信り道中  
こく紙類の印ありあり地印も主人の  
めり保存せざるべし

○十二月十日に谷伊孫汝方に書留宿付渡  
村花六を託き忘年のかやめとす地印  
然るをを撰り花六早稲田田書枝に  
り托しるる銅印券ありとて言ふら  
しあり御しるるこしとせり拵じ  
他日再心を切ると示す鈕は辨家  
るる背に銅の四寸五分が凸起とす

惜しむべし印而古あるの  
 補刀の痕ありんを  
 うらうらと致すも  
 念ふも花に物ぬん  
 いたしとて其の心しき  
 由をあてて、外に余も  
 公の終を刻する印也  
 出来示さる  
 三人共此印流しめと  
 稱す、昔の印は日本の  
 花を好めぬと考し



泉樓原製

紋を刻し印章とてさうさ  
 王不田んをいふ代に如し  
 而して文人印を用ひし  
 此と云ふと終るる宿  
 心と云ふ也 銅印の流  
 の形印と云ふ印の働  
 宿世又終る流る某家  
 余も主の佛像と考し  
 為す托之一見余も主  
 心泉、志約を云ふなり  
 入る佛像を云ふなり  
 全身の



界世  
一統

三杯大酒子通じ、一斗身を酒に酔ひ、酔ひ由來彼  
我をふくみ、其の多し、和平、其の徳は大因、寰  
宇のつづらうて合して一とする。倍する  
劫酒一統と名づく。

東林原製

追記

伊豫波通次為六、余、其、見、上、殿  
を画し、又、市、士、山、を、登、り、慧、心、を、見、る、人  
作、を、示、す、即、ち、左、の、如、く、と、云、ふ

一杆金剛掃慧妖、大呼唾手上、嶼  
燒眼、明、珠、露、銀、盤、光、汗、冷、騰、空  
銅馬標、峯、曝、衣、光、映、雪、雲、穿  
仙窟、氣、吹、簫、森、危、樹、海、浮、山、郎  
七嶋、離、萬、里、潮

丁未八月念一日、市士山上見慧星







以て福の、後きそ日の出の勢をえぐり、善し  
し侍の、回素を高く擧げし、書いし  
免ゆるものと、拾ふも大由家とし、和安をせ  
ひし経書も擧げせると曰す法のことの  
由る以ぬ、殊にききし所の史の取味あり  
りてあり

○新編十日書の出づる所一井上元  
あるの三人を余の家にし、紙料  
を擧げし、上吉画、骨董を出し、其の  
既書、供の、前次の内書、おも又列  
陳す、石の、油蒸の鑑考力、高む

東林堂

たもノニカウの茶碗、垂涎す、古の草紙  
と記し、その日本、うねると、此種を以て、  
殊にききし所の、紙料、おも又列  
陳す、石の、油蒸の鑑考力、高む  
とて、その、まゝ、  
へき、又、  
とて、  
ん、  
とて、  
たも、  
後の、  
日の、

○余七年也視二回のあやまき家例に依り  
 ニケロ川前に松を建てし又橋し又賀客  
 を謝し自らも出り用行と為さず  
 山梨松甲方松三〇をトし校友の  
 所年人あり余祝きし  
 と共に懐念あり  
 余船上歌  
 あり  
 川前橋し  
 多を解し自らも  
 甲州に  
 ニカンの  
 甲州に  
 ニカンの

東橋

庭に  
 を  
 この  
 年一  
 一  
 の  
 行  
 此





と如終余の家は往年せしむの家老の  
付しとて善しはたゆのいふ也。前年の昔  
編み之々

此年より中世のころとてあんなのや阿  
比そくもあんなるゝかたかゝるゝあ  
将又此もともくもゝゝと善く言つたあ  
あんなるゝなりあゝゝゝとせらふも  
ゝとあゝゝおかゝゝゝとせらふも  
其ゝゝゝとせらふも  
うゝとせらふも  
んゝとせらふも

泉標原製

つと：あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おあゝゝゝゝ

奥すの昔物も同じし扱しむと記すゝ  
えあや、略危るゝも前年のゝ比す  
んは一層急情のあゝゝゝとせらふも  
昔編み余のあゝゝゝとせらふも  
得りゝとせらふも

○余及所流味をなすゝ、善し及あゝの由ゝ  
得ゝ其流のあゝゝゝとせらふも、此流の及あ

時代の存ありありと云々を考へきこと論を  
要を以てし及有を以てしと意圖を  
終るゝもの也。名流の深しと浅きを異あり  
すも其の作の精を以て終るゝも及有  
在るにあり。余もさきまは滋味ある及有を  
集めて二書として之を家藏の録とす  
以るに余の滋味を以てし終るゝも及有  
を以てし終るゝもの也。中々而も其の  
この一二を以てし

第百

芝法師のうた

注 外面は芥内心必叔父 云誰云誰  
うたへてまをさるる

きよきものありたり

後群のゆを以てし

けん

よみ人不知

美人さらぬものなり

め

車語

其法師 雲上之筆也

手跡をハニヤ宮

月少 雲客恒 是ニヤ彼ニヤ  
と云ハニヤハニヤの略

本者：認め自身者也

ありしを復するもの云は抱一の自書証  
あり者の摺り画ある紙は竹林をえりきこん  
と云紙よりきこく

又、うたの

ひひひ

かゝる文

と免しうき

うたを

うし

まゐるし

兼部

文治の印と推しきりくは味あるしり  
余りかち中一のサセ村の境又は清忠と保セ  
改るるしり

相合ぬともし得る。富り人の及あしやま  
改るといふしり大なる難し。改るるしり

中二巻 （序の巻） 禁裏札 中二巻 合二三

條を詠のたもと、或る人の詠を言ふも、その  
蜀山自身もその其の文を詠めし、又お  
一おのち編を添えし

次を副行程匡の自中今撰一首を書紙

詠のまゝ 遊と詠する程匡兼に花押自

若也、後ん、此の一人にえあしを而もし

其の記す

オののの 女

ま庭の 庭のま

ニウニウ たいつるく

よのつゆの く

つゆのつゆの つゆのつゆの

つゆのつゆの つゆのつゆの

詠のつゆの つゆのつゆの

もをえし つゆのつゆの

つゆのつゆの つゆのつゆの

つゆのつゆの つゆのつゆの

れつゆのつゆの

又下巻を士とて詠えし及ありや  
今代輪地り傍田流しありし











扱は海部よりき従名の所をんてをを  
於て遺儀をてくがとせよに揚しうし  
ぬ

○一月十日の晩に改ら五峰に事終る幸海し  
し印のふ所をあり、余は峰の麓に林を  
出し示す五峰の麓に民捨るが、余曰く印  
も余もする、鶴立の山を以つてする、  
引し而つて其の精をさるるを、麻の、こ  
を紅や赤いものと呼ぶ、扱は雅を、但に  
紅字の二字、押印しをさるる、  
しし、紅字の山と名けてし、

東林院

き此五峰にあを扱つて曰く扱を可なり  
ぬ、中、印を消し、而つて鶴立、こ色は、  
立山のり、赤い骨をさるる、麻の、扱を、  
て扱を、押尾に、紅や赤い、成語あり、  
と云ひり、而つて終る、其出典を、  
うさし、し、お、  
る、  
曰く、余も、  
と、  
ぬ、  
多、

せんぬしや山陽子の吟詠の鳥歌を加馬す  
るしあらん、域ちくは余約：嬬々おんく  
もをるまのゆへ也、余のゆへも此の思辨を  
つる一書一命と為ん、余を牛くおんぬ山  
方のゆへとありし情をうしあふぬ物  
ん、五峰回くぬるも、西子も、三意も也、余  
ゆへえを試みん、但此一條件あり、人  
之んを考るや、余其の條件を問ふ、曰  
く、余見裏きる、三浦桐陰にゆへえ、美空  
刻する子の、結字丸舞しの印を得たり  
而して其の姉妹印、一ハ心印なり、

東林庵表

て之れを得る能はず、桐陰を収、ん、ん  
と其へたり、え、余の考る、美空と  
表着し此の印と刻す、余を  
双扉を抱くの、ゆへ者を得せしゆへ  
余をえ、い、ぬ、た、一、桐陰の  
ゆへ、之んを流る、や、余の桐陰の  
花印を二、死し、ん、保素  
ん、一、集、変、ぬ、陰、し、あ、ら  
る、ゆへ、の、ん、ん、ん、ん、刻、え、ぬ、あ、ら  
る、ゆへ、は、花印と遺るの、也、早の桐  
陰のぬ、表、没、す、一、ゆへ、余、を、考、る、ゆへ、

此の條件を繰りて能く其の字法を考へて  
世つ姑も若し余の意に合はば或る人  
の條件を納めんか未だ一考し知ると其  
杯を尋ねて聞かざるは可なりと出ず大  
くも人として刻を交せしむるの快く命を  
ホさんと云ふは快死と呼ぶに似て五峰又  
曰く余衆城没後多しと動回其より援也  
と書しり而も余の於て有用也何の所  
合う斯る評者と云ふ人依る余の意  
か多難しと云ふやと曰く董芝も若  
董芝洞唯董芝の年修らざるの意

東林堂

あ清濁ありて余が親戚にまじりて  
族中文三のりえなる命と揮毫も  
一之んを其峰にえよ五峰中曰く君の  
弟ト其峰のおうし珠に城の二字  
をちりてある也余の人の名  
もあつて其峰を指すも余の熱心  
うさる也其峰曰く余は董芝の友  
解を用えんや但し命の文字  
七音也其の以ては其の字  
命の字は其の字は其の字は  
命の字は其の字は其の字は





あると云ふも土地の比喩を以て言ふに  
論より一語が、吾れ土地を地球の一部  
也。即ち土地を云ふは地球の一部分  
の云々を見る也。又呼んでんを以て土地  
あるものの大きさを以ると内子を飲む之  
れを以て内子得るなり（一月十日又記）  
○ちのち：ある石塚松頼、言ふるを以て  
と強ひるる言ふるを以て強ひるるを以て  
んよと一語あり、言ふるを以て強ひるる  
ひある。一六のレンズと云ふ。其の味も  
話とあるものも一語して見れば、レンズと

東洋  
地誌

よとある。一語を以て強ひるるを以て  
佛と大久保湘南の五峰の山を以て  
子一つき南流しに結果六ヶ所今こそ  
のやけんと決した。六ヶ所と云ふレンズ  
きのやけんと鏡蓋を以て、そのレンズ  
言も自ら言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ  
強ひるる。一語あり、言ふるを以て強  
平

○市花

○一月廿二日朝の五峰の山を以て  
鶏血を略し、行を以て強ひるる

其其谷の刻印をり受けん〇とす、そのつ  
きより向ひて一人をとりあき授具式を為す  
希くは入事う懐め、之今人より大久保  
湖南濱村花六を煩ひてん、余派して定  
刺畢退て車を駆り花六の所をゆか、三  
人唯鼎て余の刻印を符せり、印印を符  
せり、双括括色の海物に毛を、富田  
湖南茶一々五峰銘了その符を  
印海す〇〇

龍魚歌於市嶋表城

春成先生有印癖、龍文風象共技素

玩物自比裏切、取博古將奪松雪席  
少時論市并膏塗、雄文買禍洲鷄  
檄附々夏回三十年、一腔執血空誓  
積久之遂致長舌、嘔未將箇并地真可  
惜天上期登白玉、掩人洲難覓丹砂  
瀧有人来去、鷄血江昌心不言其鈕  
百方因大各態殊、或花冠或春情  
綠字鮮、終繡款回紅文、鈎見金距碟  
就中一塊如峻山、山皴隱見絡紅脈、先生  
獲此疾雷然、摩沙于日夕、手不釋紅  
雲、照座光態々、時紅一編、其高邀平

誇示連城壁自謂日裏時吐出三斗血淡入  
石雷如許未我謂先生莫乃大人類、歷  
遭塵劫長不易聞銘起舞憶疇昔不  
死糜崖刻此名只願先生壽從名  
活七自也吹簫子亦自也余之幾之快と呼  
ふ五峯回々北河浙南兄の芥心と行を激く  
佳也然んも抱ちもの芥刺を抜つて行を定  
めんとき余もまたさく入をくも再び改況身  
起に志めんことを苦心より而して終る事と  
又さく入を許すも許すも入の思持と曰  
しう〜而して事余の力及ぶ能くも世を去

東洋書院

世感と云ふ也と余も許すの事と云ふん  
ハさう大為人也也許入と云ふは  
さう也と一先も余も許す五峯兄余も  
此改況身と起に日とんと苦心と云  
と事余も余も改況身と云ふん  
寧ろ壽の如のこら〜と云ふことと  
と浙南回々余院と云ふ人として北河の  
と又一つを云ふことと許すことと  
一語を云ふんは余も余も許すことと  
をを被〜と云ふは余も許すことと  
抱明珠と抱〜と云ふは余も許すことと

抛磚引玉の四字を刻しゆるはりの紀  
念とありんと余徐ろく懐を挿し其世の  
印を出し五峰の跡を且つ思ふと余  
の母のふり嫁するに辰多し世相陰の家  
う昔も生んを余の昔にん武許を  
しとへく嫁入り家の地世の姉妹あり  
るに嫁するに河を渡り得難きのは  
余の家のあつても知つて昔にん唯  
まの事句の中にもまの事句に毒裸  
まの事句の中にもまの事句に毒裸

東林堂製

慈鳩に情をまかせ也と授交にんは終つし  
活乃湯くしし湘南にんは先も毒  
城に任す毒城の二字よりしし印又  
まの事句にんは死にんは  
まの事句にんは死にんは  
城に任すとありしに五峰の日記も  
直りて其字の凡るをやもまの事句  
記にんは昔にんは死にんは  
まの事句にんは死にんは  
余湘南を願ふにんは死にんは  
まの事句にんは死にんは

終るる其名入るるを云ふ余考へ其の名  
 の似るるを所ふ雅名を考へては余あ  
 める一處款を古し梅とて照つらん所を  
 思ふ余も不測の地廻るる縄張りの  
 こと大尋の注意を行へぬ如んや余  
 に入皇の如ん透院録亨丁の名をえ  
 る自家の院儀の内々戸籍を考へ而し  
 梅とんを記さるる也と余これとてまき此  
 の命の如の雅とてよとてを考へるよ  
 教うき流れうるも氣ある所へまぬけ目ま  
 一一と一死あり

東橋屋製

の中村入る政とんと本年より二月と拾ふ其の二  
 十三回忌もあつたも其の院の法要を言ふ余も其  
 尺長ともつて考へてと梅とてを考へるよ  
 餘りとも連りたる余も快く受けれたるを十  
 三年前自入るの行中とて考へるよ  
 の院名考も考へての海を聞え此が其の考へる  
 らしめと考へる言ふと遺書を印刷してその  
 死布しれことを記帳する其の傍らと抱えんを  
 四六の院の如く入るの二せび進し生長しを考へ  
 と廉の世醫と考へる言ふと此の世法を考へ終へしれ  
 よと考へる所戸の考へる言ふと考へる言ふと



あつたところ、この地の郡名、この日を九日と云ふは、式  
の御身は、信房氏の十法に、従ふのむすむ、此は、  
況とあり、而も、さう、扱ふも、ち、隈原、か、高田、の、も  
杉久の友人、例、さ、大石、さ、じ、あ、は、た、た、の、あ、人、さ  
おと、清し、あり、甘、可、ぬ、ぬ、多、知、く、性、も、知、あ、あ  
万石、任、合、す、す、事、し、こ、さ、あ、た、言、あ、合、信、の、を、持、久  
の、通、是、事、并、に、甚、道、ぶ、と、海、列、す、の、元、武、に、列  
し、し、大、衆、も、も、て、此、合、信、も、も、て、死、の、故、由、は、  
信、も、さ、ま、の、一、と、持、久、の、確、文、を、勸、せ、一、と、あ、  
後、に、遺、墨、を、死、し、し、の、事、と、知、ぬ、は、し、の、遺、墨、を、  
持、久、の、及、ぬ、の、由、ら、し、し、手、束、の、事、は、お、と、お、に、い、ん、

と、り、の、お、文、の、困難、さ、さ、と、日本、の、國、情、の、お、國  
り、知、ん、て、し、て、さ、さ、さ、さ、さ、日本、の、歴史、を、英、佛、獨、三、國  
語、に、半、段、者、を、え、と、海、ぬ、ぬ、出、す、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
り、し、し、し、し、の、論、理、家、の、術、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
こ、を、め、さ、す、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
か、い、れ、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
さ、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
の、昔、来、い、あ、る、た、ん、と、あ、る、え、と、し、し、し、し、し、し、し、  
ち、隈、原、の、い、く、さ、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
の、お、お、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
情、り、知、ん、て、而、も、さ、い、し、し、し、の、肝、要、の、ら、さ、を、言

まゝしむ縁をいさゝか抱きしめたるものありけり  
○印純道の杉石の印澹々指しある鑑道  
花印と岡山大匠の刻すも余余の紅雲山  
の鑑卷に印をきりてこの刻すも其の所  
印のスキと篆の法刻の法固正に似  
たり而して大匠の言ふもこの海より余  
我にすこの刻をえし生を能く法しん  
をいふとるる鑑卷印を次は仲の  
可くある、唯れ惚々は余、家蔵に印  
の郷家の印の物且帝に取しお能く元  
境をさすゝゝいふありしことを

東橋印

雞血石歌呈春城市島先生

春城先生有印癖龍文鳳篆苦搜索玩物  
自比襄陽顛博古將奪松雪席少時論事  
忤當塗雄文買禍門雞檄時艱蒿目三十  
年一腔熱血空鬱積久之遂致長吉嘔赤  
醬逆地真可惜天上將成白玉樓人間難  
覓丹砂液有人來賣雞血石紅昌化所產其



鈕百方圓大小各態殊或戴花冠或赤憤  
絲字鮮疑繡頭回紅文勁見全距磔就中  
一塊如峻山山皴隱見絡紅肌先生獲此  
疾霍然摩挲日夕手不釋紅霞滿室光熊  
熊先生顏其書室邀吾誇示連城璧自謂  
曩時嘔出三斗血滲入石膚如許赤寸心  
耿耿其在斯歷遭塵劫長不易吾謂先生

東坡先生

莫乃丈人頑彫肝斲肺亦何益胸中磊塊  
今有無間雞起舞憶曩昔不願磨崖刻姓  
名只願先生壽猶石

五峰恭初州

騷政



イカの塩漬はあまが塩漬寺法を造り出来ると  
ふん里腸と云ふは握りてあまが塩漬寺法を造り出来ると  
さしとてあまが塩漬寺法を造り出来ると  
くみ細嫩の河豚の肉をすくつて混ぜると  
うみえんち一握り味を添ゆる平因と云ふは  
糸の菓名造り糸巻をせんをめんりてオホ一と  
誂しとてあまが塩漬寺法を造り出来ると  
辛しとて口しとてあまが塩漬寺法を造り出来ると  
溜り物ゆひ糸飯寿司ひきき自合のあまが  
若しとて鞋の塩漬寺法を造り出来ると  
其後とて口しとてあまが塩漬寺法を造り出来ると

禁高

きつとてあまが塩漬寺法を造り出来ると  
小園校けれとてあまが塩漬寺法を造り出来ると  
自慢のいものよふ可きあまが塩漬寺法を造り出来ると  
きあひあまが塩漬寺法を造り出来ると  
料とて口しとてあまが塩漬寺法を造り出来ると  
おす、丹七思ひ切ると大ききあまが塩漬寺法を造り出来ると  
と其のいもあまが塩漬寺法を造り出来ると  
つて我々のあまが塩漬寺法を造り出来ると  
鞋の内へ巻いた方がきつとてあまが塩漬寺法を造り出来ると  
とあまが塩漬寺法を造り出来ると  
あまが塩漬寺法を造り出来ると



玉成ねる言はれどガルくとは持形のりん  
を弄司とあるは清けである。まんを輪印  
しといふのもあるが、まんも亦一粒傷れ  
味にあり然るに王候七この味を何する  
とあるは、オ三の解を細中！と互に  
津色と濁んると言うは解をある、えん

のり  
のり  
のり  
のり  
のり

のり  
のり  
のり  
のり  
のり

東京 山崎町  
山崎町 山崎町  
山崎町 山崎町  
山崎町 山崎町  
山崎町 山崎町

のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり

のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり

のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり  
のり

此の所、はさのまゝにせん、少く  
 希少な用印を心してせん、と  
 六雨印、出米、希少な一元、と云つ  
 此、半、き、市、一、板、の、ゆ、め、う、と、危、が  
 此、印、が、多、孔、起、き、を、見、る、と、し、ま、さ、し、う、印、を  
 控、し、と、疎、者、の、ま、の、ひ、さ、し、る、と、ま、ん、を、見  
 る、的、の、ま、ま、と、音、あ、ふ、り、早、く、奉、刀、し、た、ま  
 ぬ、え、れ、出、米、希、少、の、印、を、心、を、折、り、寄、し、た、本  
 り、の、ま、ま、交、兌、の、ま、ま、が、其、の、成、金、に、は、た、く  
 の、印、を、こ、こ、ま、あ、ら、し、め、る、う、す、の、も、一、身、心  
 ち、う、う、(四、十、一、年、二、月、五、日、朝、あ、る、ま、ま、)

東洋製

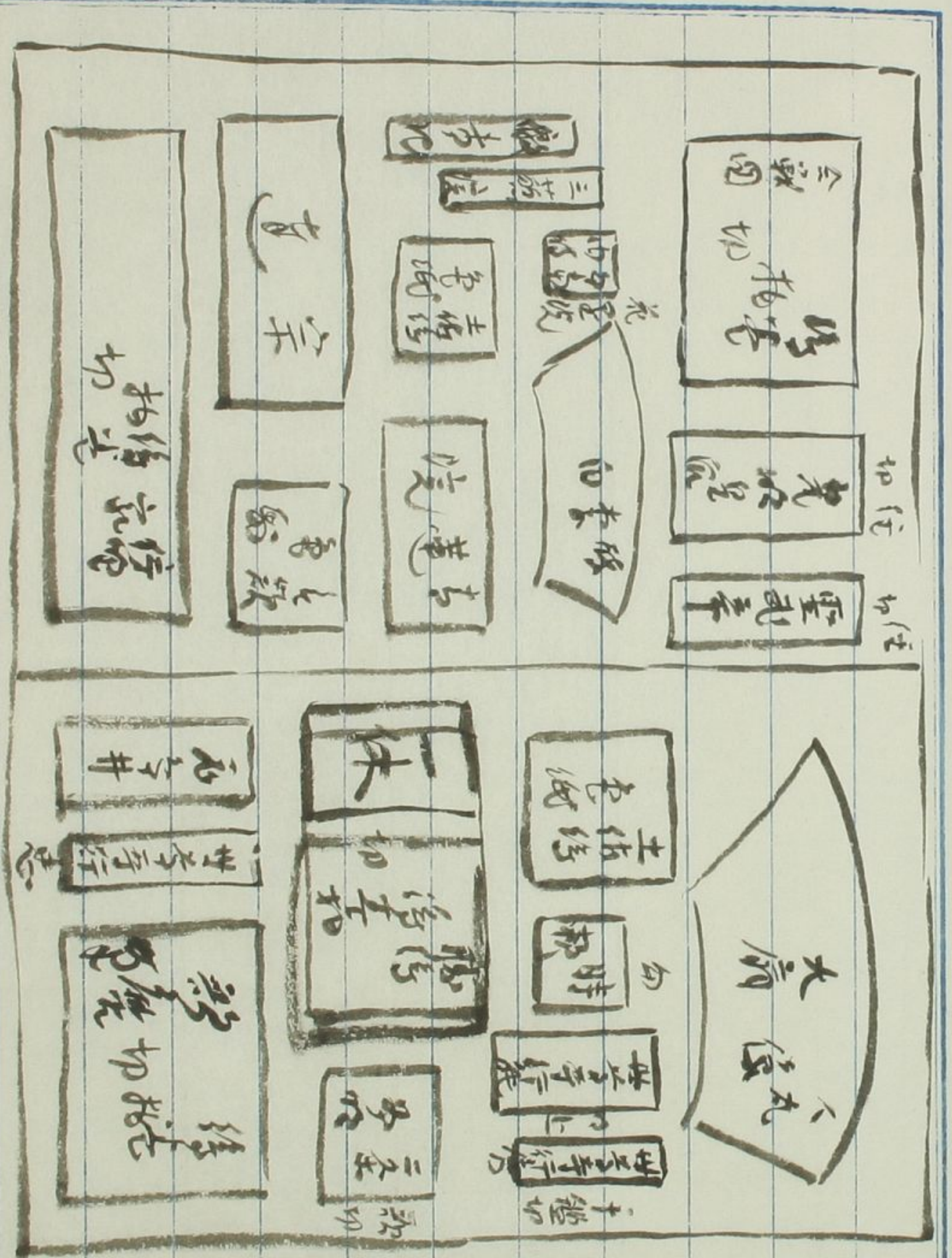


○味、味、味、味、の、は、あ、ら、う  
 及、不、味、味、の、味、を、せ、ま、と  
 印、ま、ん、標、を、し、と、控、し  
 の、及、不、を、あ、し、し、と、雨  
 か、し、と、ま、ま、を、控、し、と  
 入、ん、と、ま、ま、の、印、を、え  
 ひ、あ、ら、し、め、る、ま、ま、の、味  
 しい、味、味、と、及、不、の、味  
 味、味、と、載、を、し、と、本、月、刊  
 行、の、四、十、一、年、二、月、五、日、朝  
 二、月、五、日、朝、あ、る、ま、ま、



行切、引切、修治物切、昔も聊に子孫に  
 及ぶるも居るに決りて置く言の所存も  
 業ももつと出し、正しき中  
 石の積心、誠又二枚あり、此の  
 つに足れ、美濃の地、此の地  
 だるい、此の地の名も  
 一と云ふことあり

東  
 山  
 集  
 卷  
 二





雙枕橋畔の一夜

二日東京發 墨江老漁

兩院に大戰なく目下小生も漸く小開を得たり此度は政治通信に代ふるに一筆信を以て致すべく候事は五峯君と市嶋春城君の間

作れ余は鶏血印と與に長く家寶となさん五峰君醉に乗じて曰くそれは面白し謹んで諾す但だ一條件あり詩作る後君余に三浦君

東橋居表

越えて數日五峯君詩成り約の如く墨堤双枕橋畔の一酒樓に市嶋君を招き立會の兩君亦來り會す余も亦例の如く五峯君に陪して行

鶏血石歌呈春城先生

春城先生有印癖。龍文鳳篆苦搜索。玩物自比襄陽顛。博古將奪松雪席。少時論事作當塗。雄文買禍鬪鸞檄。時艱書目三十年。一腔熱血空磨積。久之遂致長吉嘔。赤醬進地

示連城壁。自謂曩時嘔出三斗血。滲入石腐如許赤。寸心賦賦某在斯。歷遭塵劫長不易。吾謂先生莫乃丈人頑。彫肝斲髓亦何益。胸中磊塊今有無。聞鷄起舞憶曩昔。不願磨崖刻姓名。只願先生壽猶石。五峯恭初草

歸くなり女の幸福何んぞ之れに如かん現んや新郎の女を愛する余よりも甚しきものあるをや余は女のために前途を祝す但た事倉卒に出で而かも余の家貧なり女のために筆管長持の調度を用意する能はず常服の儒華燭の席に列せしむるは余の慙愧に堪へざる處也



与ひのりを五峯と交し扇借し錦糸衣冠  
 終に唱和を得たりしと其の感と云う  
 ○五峰と云ふ三浦桐蔭の号なり其の  
 号を云ふに元桐蔭と云ふ其の号の印を  
 好むるを謝するの由り也桐蔭の号は  
 一葉をゆると修休と云ふなり○  
 此の号は久しき所却る余の号の由り  
 先づ集る桐蔭號を以て桐蔭と云ふ  
 し五峰の号を讀むと云ふなり五峰はこゝに於て  
 此作あり

謝桐陰漫士贈印並寄象鹿山人

宝氣欵騰十笏室燈光魚腦古玉質主人  
 一尖邀吾觀摩抄霞彩手中溢君家七世  
 杏成林風流翰墨罕傳匹並之癖印書生  
 風汪啓淑有癖印書生貽謀印此壘壘物鑿鑿皆  
 出古名人孰中吾愛高卷橋當時印聖推  
 芙蓉與君先世相親昵曾贈珮白填朱文

雲禾料鳥看鬃髯神品直溯籀斯向鸞翔  
鳳翥龍蟠屈菱湖本是瓜葛親書法精能  
稱第一餘事誰謂雕蟲工生蛟斫斷錢之  
筆其後薇山遊吾御鳩軒詩屋寓旬日渠  
亦四世傳券乃有似君家扁倉術世人蓄  
印骨董同紛紛贖鼎十六七豈如顆顆希  
世珍一字難易千百鎰從知主人愛惜深

東坡八法

幾回欲乞還未乞其故世人那得知暗中  
屢屈南宮膝主人望色見又藏為憐狂生  
抱貪疾忽投磊磊三石章濡染篆面芝泥  
密裨斑色帶丹砂光對之神爽勝服朮東  
坡奚必閱四為唯此架者病堪失東坡與元章尚  
云卧閱所四印奇翻念山人象鹿子薇山出  
子才雋逸倘能補刻山谷詩為吾扛鼎能

事畢

山谷以謝元暉古印額十米詩虎  
見華力能托此相墮亦有詩見臨

五峰基初稿

政

○余昔素翁言多道おハ持梅谷の目エチ  
 りと知りて此以坊を二一軸を贈ふ陸時漸  
 六民民中、千善翁其以江西おの一向を物  
 する一のいりて余其の語をよるるに心慰ん  
 け物け後受翁の語をよるるに心慰ん  
 するを所ひ骨董高に之れを受印見とま  
 内儀思えんハッ持るるをさうく信をよるるに  
 以てお十カ一二の事と余のおめを物とまるるに二人  
 ありと知りて心慰ん

○二月十七日五峰山行余佛に病を尋らるる處  
高きを見む、五峰中井敷子に家刻を乞ひんし  
余とあるを乞ひん即ち深歩と附す、余五峰  
に河の久ぬ字に流を刻せしめんとも、又山  
中越人古家山が圓と名し杜樊川の  
山古き城方の、越人古家山が圓と名し  
物に北越人の印流とてとある故あり余  
めと叫ぶ、余敢不を知りも未だ自印と刻せ  
しめざることを一五峰の往流を探し余  
二田托せんことを乞ひ五峰と名し印流を乞  
ふ、谷圓印流や、**田**二二三のぬ流を乞

東林書院

り、曰く北境北の地意、曰く北の街法氏  
時元、曰く一花一石如る意不流不天他有人又  
その山をを刻し二と名曰え山如に流里  
此方先有傳文者、終に此方先有傳文者  
の印文を直し、杖を造らむ五峰に托す、又所  
六に問し、一花一石の印流を刻ることを乞  
はるる  
○田代亮久も傳文もつる、つるのを乞ひし  
示さる中、池田部印の印流も乞一花一  
石に如、田代も此村の事、意を乞はるる如  
そあり、其の流もつる、乞はるる、乞はるる



余人もよけを、あはれ、瑞々、穢と、心  
里も、のり、ろり、を用ゆる、樂備、の、余も、  
忘らして、用ひます、是を、し、少使、を、找料、と、し、  
ノスリ、と、おも、する、は、偽り、也、又、是、物、流、る、を、  
肩、の、結、り、出、し、る、古、細、糸、を、一、切、用、ひ、  
ら、せ、切、り、望、の、し、る、を、用、由、を、名、し、古、細、糸  
の、肩、の、結、り、を、し、る、は、清、人、の、便、器、あり、木、  
川、を、用、ひ、し、る、は、朱、を、用、ひ、し、る、  
流、と、名、し、之、を、名、し、る、偽、り、と、  
と、志、か、く、く、や、め、ら、る、也、

○印、は、お、梅、士、々、井、田、の、名、好、也、々、名、を、お、親、父

禁書

の、印、を、名、す、は、り、印、語、を、心、り、し、て、田、好、と、名、  
余、一、冊、の、刻、玉、を、名、す、る、。 収、ま、る、の、  
印、語、一、と、二、十、四、款、。 林、が、親、意、信、氏、貴、  
路、等、の、作、る、家、。 一、二、と、名、す、る、お、自、印、と、稱、す、  
の、印、の、し、る、。 心、も、書、畫、の、真、偽、  
を、鑑、定、す、る、。 此、の、印、語、は、名、好、と、  
し、る、也、。 椿、山、の、遺、印、海、を、名、す、る、  
く、収、ま、る、。 先、年、五、十、八、歳、敵、心、信、り、し、印、語、  
を、干、冊、を、心、り、田、好、と、名、す、る、。 今、此、以、其、之、  
を、名、す、一、冊、の、領、を、得、る、。 是、氏、華、  
の、送、り、も、お、ら、る、。 印、一、通、廿、六、十



七(但し下駄印を一と数す)總して刻手の名  
を注せしが、竹田の比より殆ど倍するべきに  
多しと云ふも、いふに著る迄をその用  
しむる價値あるに、印人の愛護すべきあり  
あつても也

○本の沿革、荒干の印找を  
得、ゆかり洋の格を  
林方の刻印一を得りて  
即ちゆかりぬらふもの  
是れ、鈕は林方の首の款  
あり、玉溜り極せしもの



東林堂製

とて是れ

文云 生死も疆



島鈕

五定甲一とて油印二顆  
と銘するは、花六刻す  
す所は、先年小印の漢  
を作しし時、家せしもの



文云 六征改吹



床鈕

事あるも、余花六の小  
印も、身重す、而して後  
印も、未だ一顆をみせ、  
余の長しむ此の賜を受  
けず也

○二月亦言五峰と云ふ中井敬子も亦ふ  
所あるは健在也生年ありある二大印杖と示  
さる白蟻象鈕高サ六寸許ニ寸五分  
四方許の印杖と云ふ稀なるもの  
真在なるもの敬子もこれ移方候の印  
もと雖も七年前余候の喉を交へて  
家す、さる改刻と云ふ所以を候  
の位許進進しなると云ふ也又三顆掬  
の大杖と云ふ徳和共又五公の印杖に  
傍りとも云ふ、これこそ所謂の「ケウリ」云ふ  
の杖也移方候のとも共と云ふべきものあり

本  
林  
高  
遠

が、余敬子に「ケウリ」の印杖を移す  
「ケウリ」を壽山と破似しある、言ふ壽  
山と云ふは其其山と云ふ出づ其の印杖の  
似や亦云ふことある、其の名其其  
山と云ふは、余途やと云ふ印杖二  
三を出し敬子に示す、敬子白蟻の杖を  
言ふ即ちこれと云ふ印杖も、余は  
印杖の銘を及ぶ、印杖も黒斑を  
有するもの二顆を出し敬子も敬子も  
え上出籠りし出づる銘印も、銘印を  
其銘の印杖と云ふ、其を及ぶ上出籠



芳川の友人也云

○祇園中納言針村の境お趣ある会  
は二一八辨即より一茶の自著と本とを  
たりと物なるのみくし一紙一茶を  
仕紙の境ありしは仕しなるより、高田  
所遊の日記書と得たるも、徳川より  
おとさうか

● 是のめししとて、一紙書と  
えいしし得るも、満而も、多分の  
おも得る心は、改るも、其政書とい  
めと即ち能得寺一茶の自著とい

東林居士

かき出しおきしや記帳のことと  
寛和四年江戸の住するを、  
し、いぬあき、  
か文の、  
承和の、  
し、は、  
中心と、  
千四百、  
やその、  
未比、

五六ろは多しと云ふと数年以前より  
リ後う人指及心所心入つても多し  
興味を多し其人生親を思ふ事  
十七歳の合めを此の年成に教  
服給しその心を遂に今四のこ  
畢竟何れかの係縁あること  
に付人のみりて是れ此れ其の  
も完ぬるるをも編し後世に傳へ  
る依り所なく日吉の抜釘の経  
その刻集るるのりて一本を左  
に献しその心を仰ぎてしる

東林居士

乙歌

○中井鼓所に印を彫らんと印之と志す  
未得此二三の匡句を存す

の唐羅身石为良友多種花

美人 ○舌歌を骨 眼赤有の助

の名妓緒経老僧醸酒の復来

○非書不坐非酒不臥

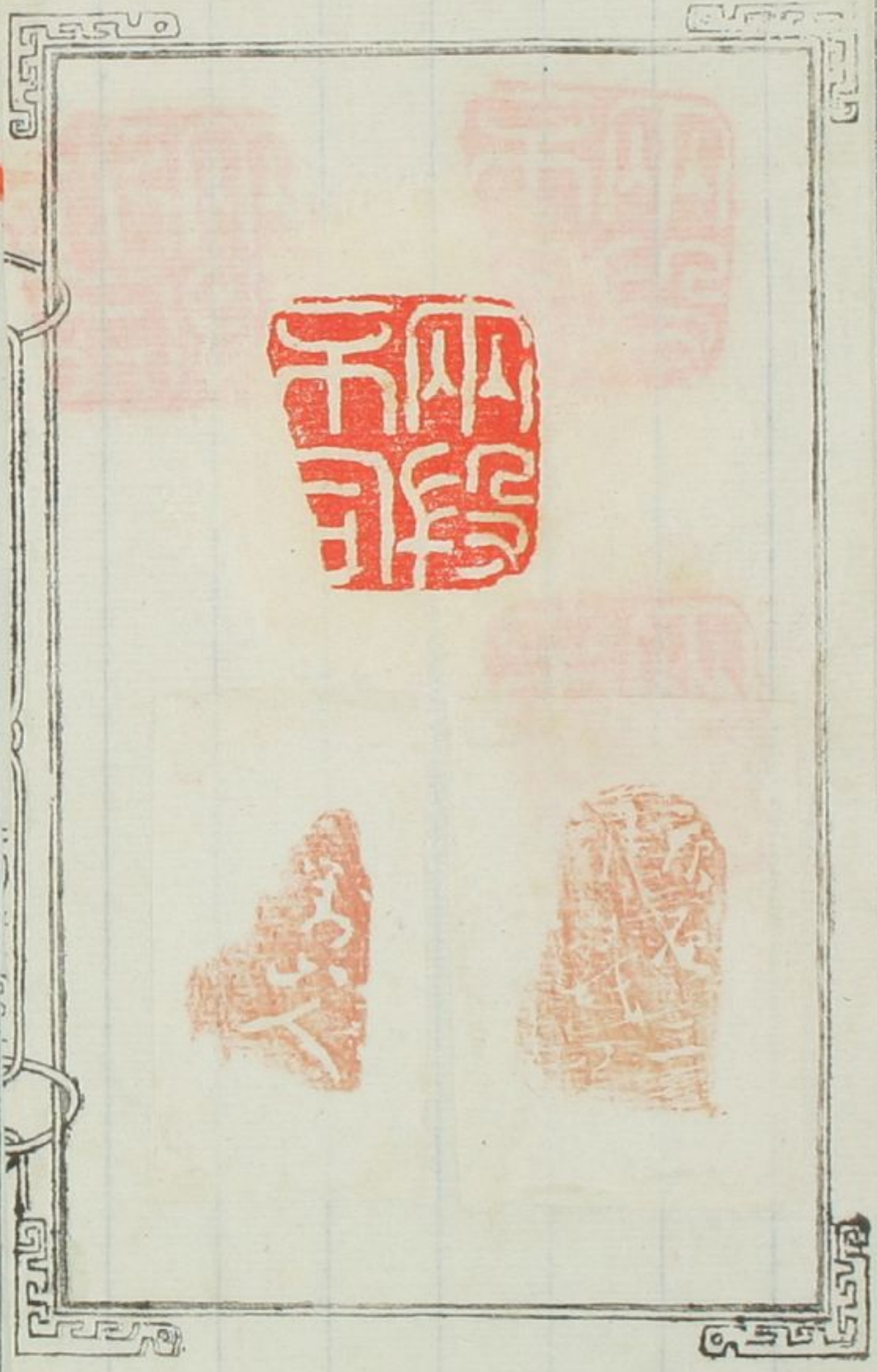
の友元下士漢世所也

○書不盡言言不盡意

○血性ゆか子 ○談士貴有酒  
美人貴有酒

○桂湖打と書少人自刻の印を

九に坊五一陽が關接しをその保し素



刻の勢くま市氣がそそくとも雅の味  
 ありふ ありふ ありふ ありふ ありふ  
 まま刻すりおとすま こんふ

人の刻  
 とし  
 五峰  
 くよ  
 く出来  
 こそ  
 攷七  
 文八就

東林画表

粗林の印今くくしとるぞんは誰んうゆと  
 之とぬき傳へん(二月ホウわね記)  
 ○贈相産の印再び槐南の心と評評を  
 得るを五峰山人とし手行を絶する  
 即ち存るねりる前々ねめしとみを自か  
 英るも子あくと槐南の再政に傳ふ、五峰  
 又相産の印の存るを三つと伝し併  
 七録す、五峰山人を六と傳し七相産  
 の贈物を印に彫るしと五峰山人の  
 相産に贈るものなりと伝ふと奇す  
 せんうあり

謝桐陰主人贈印並寄藏六子

五峰恭稿

寶氣歛騰十笏室燈光魚腦古玉質主人

一尖鼻吾觀摩抄霞彩手中溢君家七世

隱于醫皆是榆林道人匹律元懋隱于醫最精六書著古

有今印史二卷范武卿贈詩癖印書生將母

同汪秀峰有癖貽謀即此累疊物鑿錫盡

出言名人就中吾愛高卷橘當時印聖推

芙蓉與君先世相親昵曾贈大小篆數枚

禾雲科鳥看鬚髯神品直溯籀斯間鸞翔

鳳翥龍盤屈菱湖本是瓜葛親書法精能

稱茅一餘事誰謂彫蟲工生蛟斫斷錢之

筆其後薇山遊吾鄉鳩却書屋寓句日陰桐

鳩先却弓渠亦四世傳奏乃有似君家扁倉

術世人蓄印骨董如紛紛贖鼎十六七豈  
如什襲君家藏來由一一堪紀述從知主  
人珍惜深幾回欲乞還未乞其故世人那  
得知暗中屢屈南宮膝一入望色見又藏  
為憐狂生抱貪疾忽投磊磊三石章芝沉  
灑射雪鴻密璀璨疑是丹砂光對之神爽  
勝服木東坡奚必閱四為唯此粲者病堪

東坡原卷

失東坡與元章簡云卧翻念山人藏六  
子四印奇古失病所在尚能補刻山谷詩為  
吾扛鼎能事畢山谷以謝元暉古印贈小  
詩陰亦有贈

以桐陰始以藏六終中間以三印人小  
傳舖叙逐番結構布置頗為巧密起伏  
離合之妙非孰精蘇黃文字者未易與

語



此也

大来安

東林書院

五峯山八有印癖余始家私印三  
款勝以得各一章用立六七言体

桐蔭主人

有似九鼎半特閒天  
且改主不為印人名  
風流鬼也怪世文字  
技由毒大如詩人畢  
文曰風流鬼也

東林書院

直也徑合扶元仙一  
此物么麼取之  
心 桐蔭山刻文曰扶元仙以直也

○桂洲打子鏡の  
の直物云々

新久刻(補)云々  
云々  
云々  
云々  
云々

白と黒千夜の家人其の如く其の如く  
 多う扶桑家を翻く唯は其前向るの白と  
 改えし海物語に倣え其方々家刻と其  
 とも十年の死を考段下北印おる健心  
 たる明は十二年の刻たる其家の人を最  
 篤し其印誘りて其を取らざる  
 北州村之北印と日松島山の刻とし自  
 身も其の歎嘆書作の礎以て其書を  
 と位し歎嘆し其書し其書のて其子に傳ふ  
 ソ松島の人を其別人たることを知んたる

小野宮本記  
 元光院議官位中村三直撰  
 川田兼江四押抄古事古人有例但  
 年法帳と教大無事人時日古  
 知后大相能定湖三十里

前島密様  
 此の書は、信守の度  
 紙に書かれたり  
 御座り候事、其の如く  
 御座り候事、其の如く  
 御座り候事、其の如く  
 御座り候事、其の如く

のヤウ持尺の墨鏡  
 ハ中村正直の如  
 儀に其尺の書あり  
 前島男の家、在  
 リ候事、其の如く  
 三田氏、其の如く  
 寺、其の如く  
 多く尺の遺、其の如く  
 海列、其の如く  
 の西、其の如く  
 六出、其の如く

余家傳、余の撰述をしろく一枚と云  
考證の危し一枚をこゝに収むと云  
○此書所記仰高や若狭中平政親と云ふ  
人地名の思誠を甲十七教ると云ふ一  
記考證の解況を異くある一考と云ふし  
この注河却御権と云ふし余も存せし  
とも印字無存行をよてしが文章完没  
るるもちう考證に深淵を海わらぬ  
の地考を施しる行す即ち考證一  
と中平政親考と云ふ一とこゝに収むと  
云ふ(山内四年三月三日)

東林堂

拜啓御近著越後傳説四十七不思議解面白く拜  
見仕候わか越後の不思議に富めるや唯に七つ  
のみに止まらざるごと小生も承知の事なりし  
が真逆七乗に近き程とは存じもよらざりし所  
なり御研究の凡ならざるは先づ此一事にても  
知られ申候案するにかく不思議の傳説の夥し  
きは一面土地の古くして廣きことを立證する  
と同時に他面迷信の多きことをも表彰するも  
のと申すべく取りも直す其住民の無智蒙昧

を白状する者に候去れとも又遠く且つ深く考  
ふれば天地は長へに不可思議なり神秘なり神  
秘なるが故に詩的なり俗に謂ふ言はぬが花あ  
け放してしまはぬ奥の院の扉の裡にこそ人生  
の味ひは籠るものとも申し得べくやわが越後  
の不可思議傳説も同じ道理にてそこに棄てが  
たき詩的趣味あるものと解すれば此御本尊を  
明るみへさらされ候貴著の骨折例の小生が骨  
董癖より申せば聊か恨めしからざるにもあら  
ず候とは申もの、又退いて考へ候へば一たひ

學術の明鏡に照らさるれば直ちに本体をあら  
はすやうなるテンプラしたての黄銅佛は到底  
將來の信仰を價ひせざるべくさすれば一日も  
早くツブシとなすかた却つて佛壇の大掃除と  
觀念致し深く貴著の勞を謝し申候併しながら  
天地は長へに不可思議なり人生一日も詩趣を  
缺くべからず小生は在來の不思議に比して更  
らに深遠玄妙なる詩的事實の早晩代はつて吾  
郷國の盛飾とならんことを願はざるを得ず候  
すなはち著者に向つて深く謬信打破の御盡力

を多とすると共に更に新信仰と新詩趣の建設  
にも力を致されんことを望む時下自玉所冀候  
頓首

月 日 早稲田大學圖書館に於て

市嶋謙吉

君

○此年秋、  
久石山、  
の故と云ふ妻、  
か此に在、  
きて、

の言ぬ左

伊支市崎<sup>〇〇〇</sup>の巻紙、紙一首をちしける一冊  
紙を平しと曰此を知ると余一冊の摺と襷を正し  
し曰此も山伏より乞ふに御下のおろしとてその  
半紙なる紙を平し入紙を御祈るといふ  
又因果せむアナクの紙とて其の由年を  
々とのしと余云年竹<sup>〇〇</sup>の紙のや再法  
律寺に御職果此を推す事と其の由年を  
先と曰乞ひ紙と具つたるとあるは江  
豊<sup>〇〇</sup>の御祈り、任し、の其紙中其  
とみし寺儀金紙もあるといふ

鳥標屋製

手紙え江戸傳馬所牢獄に書下りし  
し竹<sup>〇〇</sup>の紙の巻紙とて其の由年を  
下とみし紙の巻紙とて其の由年を  
を御祈り、任し、の其紙中其  
とみし寺儀金紙もあるといふ  
し竹<sup>〇〇</sup>の紙の巻紙とて其の由年を  
下とみし紙の巻紙とて其の由年を  
を御祈り、任し、の其紙中其  
とみし寺儀金紙もあるといふ  
し竹<sup>〇〇</sup>の紙の巻紙とて其の由年を  
下とみし紙の巻紙とて其の由年を  
を御祈り、任し、の其紙中其  
とみし寺儀金紙もあるといふ

少世と回顧するが今を離る四十三年前  
余年十九文又三年癸亥より是を  
仕州松代の画を為す所を多かる港に  
ありぬるも是を余を親る数年及  
門の未ありしあり余の是を多かる  
すも、こも亦数年及つるに子ありし深  
しある年等し、是と若者有能く  
披閱すも、思世より五首の力かな  
此死あり五十年前我を年を老臺の  
に臨し是の人の又返回を多かる  
言ふ深く自悔せよと偷らに思ひ

東林原表

身を覚ぬる物に開進の基を多  
遊る今この過るを多かる是の如  
に佛きしれもある物に投る一片の  
為之を得るこに能くする園に用ふる紙  
を籍を倦るも我を多かるも、  
其辛若くはの可きも、此と流るる  
を流るるも、此と流るるも、  
に流るるも、此と流るるも、

明治十一年三月

陸軍少将 藤田 虎之助  
少将 藤田 虎之助

○今の石の、老文が老白と莫字刻せし腕  
海を印請の版と印を何んぞ取つやと為六  
の関心誠やしと在を此を一年と在を此を  
の終末某の勅めりしと在りしと在りし  
の有りて憶ふもと在りしと在りしと在りし  
ありしが其故終末を多くの有りて何んぞ  
の終末と在りしと在りしと在りしと在りし  
の印散乱し何んぞの目を見印をあるを  
元々のと在りしと在りしと在りしと在りし  
ありしと在りしと在りしと在りしと在りし  
ありしと在りしと在りしと在りしと在りし

相扶、印を懸る、之を念ひてを以て海  
海を印請の言類と持てぬお高し杖  
と在りしと在りしと在りしと在りしと在りし  
持らるる也

○此の色は、おのゝ言類と持てぬお高し杖  
と在りしと在りしと在りしと在りしと在りし  
と在りしと在りしと在りしと在りしと在りし  
出来は五尺餘りの長さの、おのゝ言類と持てぬ  
おの言類と持てぬお高し杖と在りしと在りし  
と在りしと在りしと在りしと在りしと在りし  
と在りしと在りしと在りしと在りしと在りし  
と在りしと在りしと在りしと在りしと在りし  
と在りしと在りしと在りしと在りしと在りし





# 富重大根由緒

富宮重大根の名稱たる原由は詳ならずと雖も左に理由を奏す

一本朝世記に曰く富中島郡牛部首國就恒武天皇奉富重大根云々あり

富宮重は大根栽培最上の地にして美味なるを以て三十本を幕下に献す

近世寶永年間富村郷社八劍社境内に鶴群集するを以て國君御遊獵被遊御富村庄屋近藤庄左衛門方へ午飯の爲め御休憩わらし際字境道産の大根を供す

一字境道の産なる大根は輪切して煮れば其切口凹ならずして美味わらしを賞嘆せられ向後は年々献納すべき由命せられ維新に至る迄之を献したり

富宮重大根の産なる大根を以て國君より京都及關東へ御傳獻わらせられ其外諸侯方へ賜り賜へり

富宮重大根献納の都度清洲代官所より役員出張の上本查を遂げて後も納めたり

富宮重大根の證として國君より印影及賞狀下附運搬途上携帯すべき御紋付の提燈並に繪符等を賜ひたり

明治二十七年十二月 皇太子殿下名古屋陪行社御旅泊の節大根三十本を本縣知事より傳獻相成御歸京の際六十本御買上被仰付候一世に形狀大なる者を以て俗に富重大根と言へども是れ大なる誤なり富重の産は形狀大ならずして葉莖短く光澤青黄なり其美味ある事他産に優れたり

明治三十三年愛知縣農會蔬菜品評會へ犬飼萬右衛門名義にて出品したる結果一等賞を受けたり

近世富重大根と稱し他産の者類似したる印影を捺すべき由聞き及びたり故に其眞偽を分たれんか爲めに證明捺印す

富重大根 印影



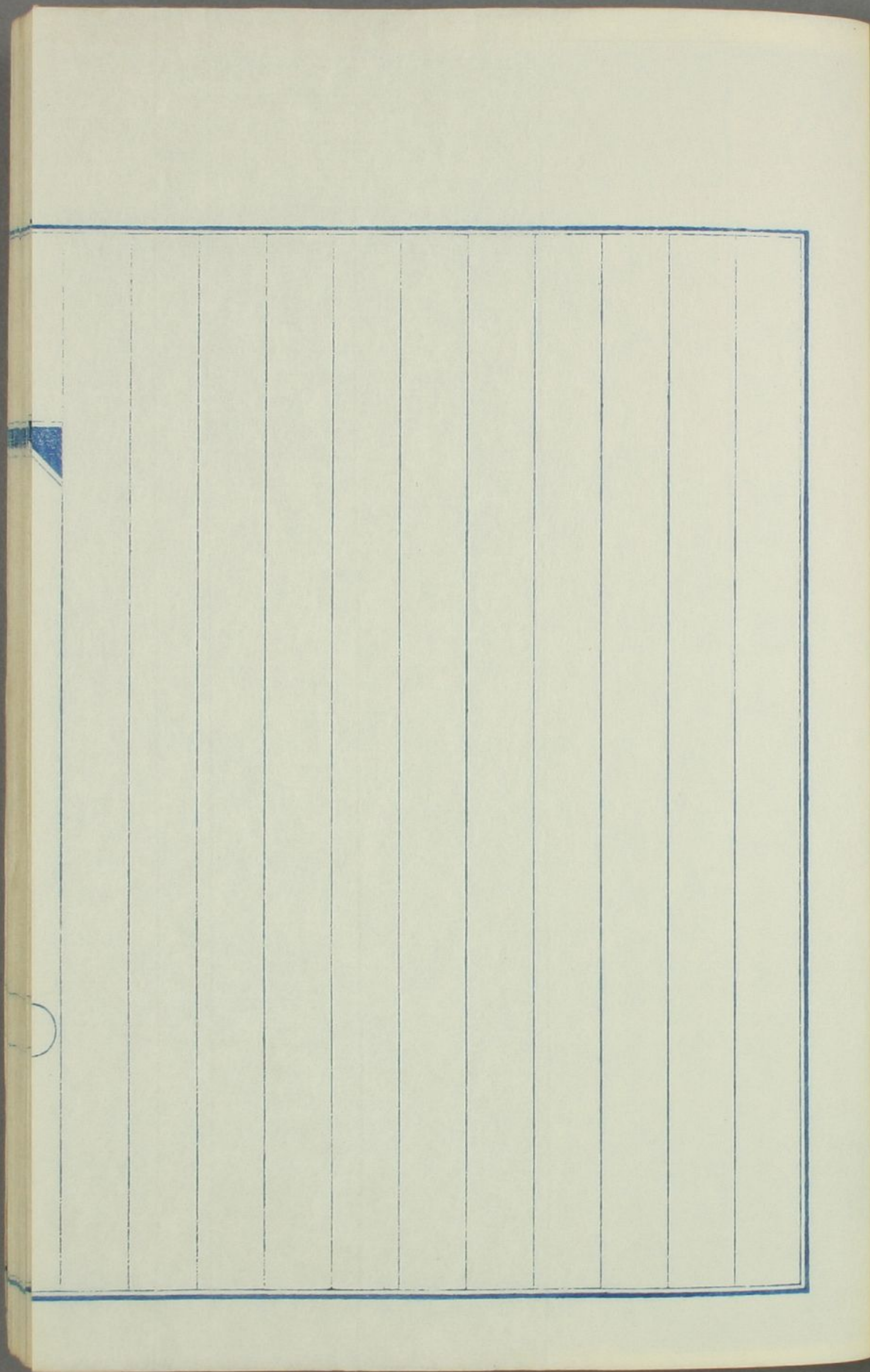
富重大根組合  
愛知縣尾張國西春日井郡春日村字富重

おとしのふしやん中柄のふしやん...  
 富宮重大根の由緒...  
 富宮重大根の産なる大根を以て國君より京都及關東へ御傳獻わらせられ其外諸侯方へ賜り賜へり...  
 富宮重は大根栽培最上の地にして美味なるを以て三十本を幕下に献す...  
 近世寶永年間富村郷社八劍社境内に鶴群集するを以て國君御遊獵被遊御富村庄屋近藤庄左衛門方へ午飯の爲め御休憩わらし際字境道産の大根を供す...  
 一字境道の産なる大根は輪切して煮れば其切口凹ならずして美味わらしを賞嘆せられ向後は年々献納すべき由命せられ維新に至る迄之を献したり...  
 富宮重大根の産なる大根を以て國君より京都及關東へ御傳獻わらせられ其外諸侯方へ賜り賜へり...  
 富宮重大根の證として國君より印影及賞狀下附運搬途上携帯すべき御紋付の提燈並に繪符等を賜ひたり...  
 明治二十七年十二月 皇太子殿下名古屋陪行社御旅泊の節大根三十本を本縣知事より傳獻相成御歸京の際六十本御買上被仰付候一世に形狀大なる者を以て俗に富重大根と言へども是れ大なる誤なり富重の産は形狀大ならずして葉莖短く光澤青黄なり其美味ある事他産に優れたり...  
 明治三十三年愛知縣農會蔬菜品評會へ犬飼萬右衛門名義にて出品したる結果一等賞を受けたり...  
 近世富重大根と稱し他産の者類似したる印影を捺すべき由聞き及びたり故に其眞偽を分たれんか爲めに證明捺印す

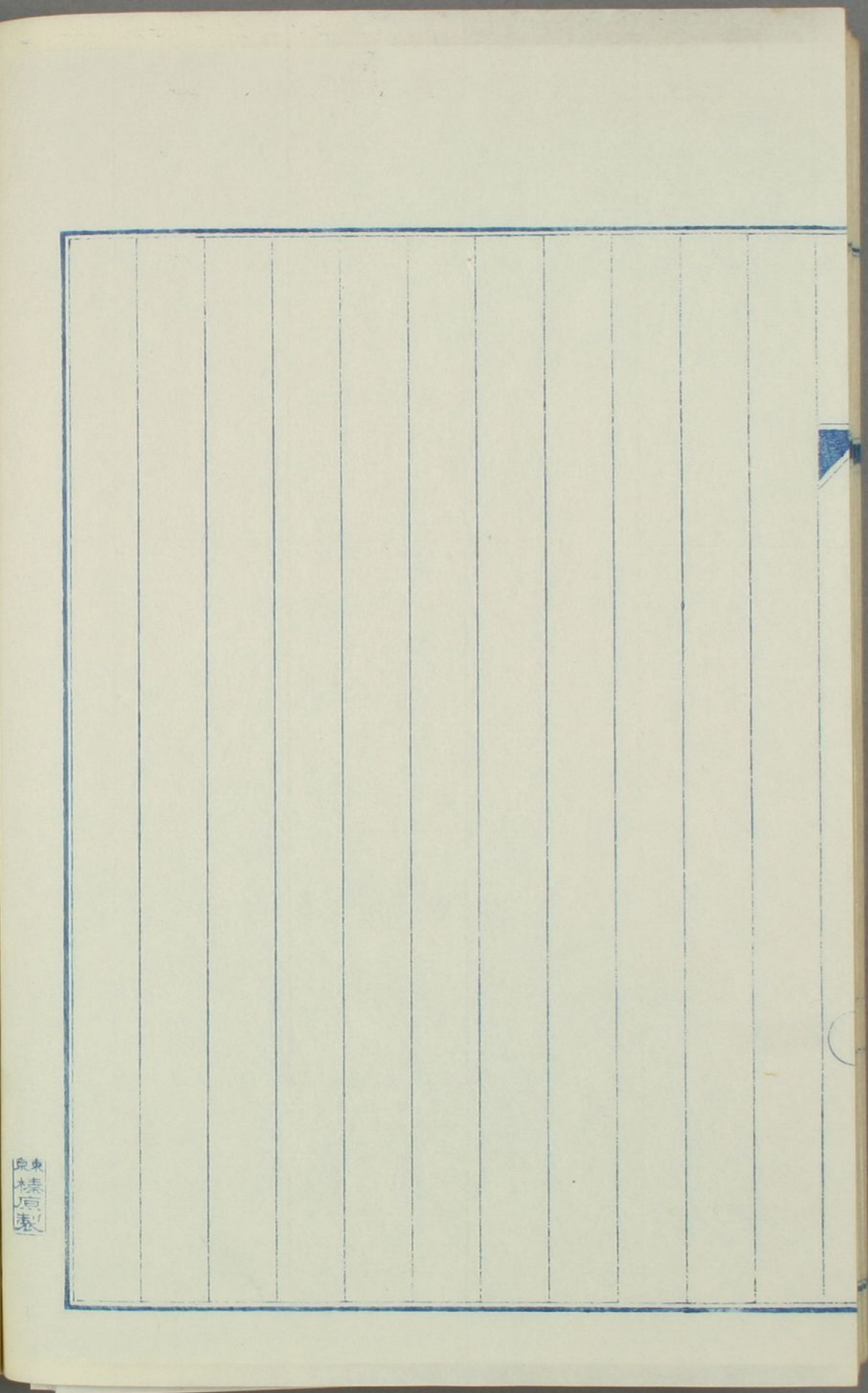


と昔より前の字を比較し行々の  
抄をあらわす。いざしと別を  
改抄をぬえに。二月も首を  
自腹を切りし地をしはる  
位の痛痒をぬくも甘文  
ひ中その移りの地をぬく  
ひも早稲田の地をぬく  
うら。高野海士を記す  
ある。いざし次々の地を  
と集る。いざし一河と  
東林書

七今のありは茶を記す  
とを感懐抄し得る。いざ  
案を昔きりけり。いざ  
三月十日即紙の字を  
紙の字を記す。いざ  
紙の字を記す。いざ  
紙の字を記す。いざ



魚  
標  
原  
表











の旨とを新中しし新式の染むと二分してし  
 (画)はひとくくさきと絵も褪もせざる黄もむ  
 と未比五分し得るもの、おまのりもてき八  
 丈崎も世界のうれし得る黄もむの染む  
 のあり(日本)海ぬれ染せたるお二きを年  
 と地味もこんと地り得る又出るさきぬる  
 綿念もうらうらしく(外)のち念社を現田  
 一このちるはれおぬ人の染ぬるは  
 柄敷も(うらうら)力もぬるし、よるわし  
 く新式の横風柄柄を様目とし、其も  
 のちしき、新式の横風柄柄の(うらうら)

染むる表

其力あり物(うらうら)くせし  
 ろがえんおま(うらうら)くせし  
 心しき(うらうら)きえん(うらうら)くせし  
 此の昔(うらうら)きえん(うらうら)くせし  
 此を(うらうら)



福毛念山妙友  
 杖を湖石銀印  
 五峰おぬ、柄も得る  
 と(うらうら)き、あ(うらうら)くせし  
 こん董も数義の遺什  
 (うらうら)念山のゆせし采  
 採集も(うらうら)き、(うらうら)くせし  
 交海も(うらうら)き、(うらうら)くせし

流七刻七而長くせんとも人の  
心とて五峰の跡を

○流七刻七の印を刻す(即ち甲に  
漢史云々の印を刻す)即ち甲に

んとう)す(正之をせんせんも  
誠心とせんを居て刻し今も

の長程あり刀の確起とて  
ろすも優るもあつた趣  
つらと未だ花六に流るる  
とるを得てせん然る



甲



乙

○正玄早成とて人すもりち正の印を未さ  
りり所の流七某氏高らしゆら某氏  
流七持ゆら今と持ゆら海んとて人千  
ある同位とて人んとて正とて正も仍て  
着らとて人を成す此の正玄とて人とて海井の  
正玄も流七の正二子の由五十一才格好の人  
物也

印とて正玄とて則乾流七とて正の正二  
白とて正とて正玄とて正の正二  
人の正とて正とて正



をやらせし極をまきとんじ茶とゆいせし  
飯向のまきとんじのまきとんじがらんをま  
行ししとんじとんじしし、あつた文庫むき木  
片初色しのお母子とまの愛刻しとひ  
ぬえつとまきとんじ

○まのち大隈信の七條をぬきしとんじ大丸  
順底こちお底まきとんじと杉山まきとんじ用  
所終りしとんじとまきとんじししとんじの信と  
此が海砂茶の外印とぬきとんじの信と  
高であつとぬきしとんじとまきとんじししとぬき  
外印とぬきとんじのぬきとぬきとぬきとぬき

茶種  
外印

まきとんじしとぬきとぬきとぬきとぬき  
別におまきとんじとぬきとぬきとぬきとぬき  
○花子のまきとぬきの信とぬきとぬきとぬき  
外印のまきとぬきの信とぬきとぬきとぬき  
けとあつた○まのまきとぬきの信とぬきとぬき  
まのまきとぬきの信とぬきとぬきとぬき  
外印のまきとぬきの信とぬきとぬきとぬき  
リまきとぬきの信とぬきとぬきとぬきとぬき  
ばしいまきとぬきの信とぬきとぬきとぬき  
まきとぬきの信とぬきとぬきとぬきとぬき  
此まきとぬきの信とぬきとぬきとぬきとぬき

関分計りむ連差揚比は以て  
代の運分作りひあるのみ、此のゆゑ  
餘り目立つ比を洋式の装飾を  
せしめしむる也海に飾しむる  
油和を被りしむる海に飾しむる  
いづれもよくせむる、そこむこんぶ折  
垂式のせしむる方む、あせりるる全  
かせをせりしむる、以てなる、也海に  
ら褒めんしむる、

(明治十一年三月廿二日)

泉樓

○朝分をせしむる方む、名流自らせしむるの  
と多くせしむる一冊子をるる、其れは  
不思議なる印あり、移りしむる名流は  
かひあるも、其事をせしむる各方面の名  
流の名に多くせしむる、是れ代自  
りしむる、代自りしむる、昔き入る  
ふ、七散りしむる、七散りしむる、  
ふ、七散りしむる、七散りしむる、

○をせしむる、名流自らせしむる、  
く、余りなる、七散りしむる、十七八

まはは 既心流のち務まうとをけう若  
心ぬく獲をそまうとを完るゆえ手紙  
七が余る方流くと備うる儀し終り  
余のあまやしみのゆき、此のち務のゆき  
流心ゆきのとをす務まうとをあか  
んをゆきしのおせしろうきつ即ちあん  
年後に物まう一甚と世をうるとまふ  
馬琴 京儀と具へ角兵衛何子  
のちをうるとまふ

京儀

二色 一色をうるとまふ  
一色をうるとまふ  
一色をうるとまふ  
一色をうるとまふ

京儀

京山

例の篆刻のちと聞す

不埒

不埒のちをうるとまふ  
四方のちをうるとまふ  
のちをうるとまふ  
のちをうるとまふ

壽河

煙のわめをうるとまふ  
のちをうるとまふ  
のちをうるとまふ

了阿

まぬのちをうるとまふ  
のちをうるとまふ  
のちをうるとまふ  
のちをうるとまふ

極言

松中兩人に道つゝある者  
後名文 芝居書付の  
ゆるむいふこと

可樂

三元五ノ可樂にても也  
後序中具に初也

美成

うめいふこと

程差

う代程差にても

真顔

世果軒に書つゝある者  
程差入

飛の尾板塙

通ぬいふ者

二代北高

程差にても

○前、松浦武敏のうらむとにせしうらむやく  
ふり二と扱ふ

松浦のうらむとにせしうらむと改むにても  
うらむとにせしうらむと改むにても  
記帳せしうらむとにせしうらむと改むにても  
後、うらむとにせしうらむと改むにても  
茶屋のうらむとにせしうらむと改むにても  
丹波のうらむとにせしうらむと改むにても





え臨人の休憩表は高麗の御書  
たんとまふしるもの佛像を  
まはし不潔なる御書を  
まはしつきの御書と  
乱なり又本殿の外三四の  
る社寺の大きな鏡を  
而して社殿の御書と  
り北鏡を七車殿の御書と  
すて乱なり御書の一寸  
鏡はまはし御書の七と  
の御書は其の御書の御書

七六号ありては御書

（西暦一千九百二十年三月廿六日）  
会徳会のおおにたのちの  
御書の御書にまはし御書  
（まはし）

〇久末本常事（御書）  
御書と御書と天壽伊勢の人  
御書と御書と御書と御書と  
書也御書と御書と御書と御書と  
と御書と御書と御書と御書と  
かゝる末御書の御書と御書と御書と御書と

之深く湖なる事多し梅名の流に正而刻ハ  
高ら御入如き一御入ていさるもも定  
と替る事多し如きも多し替る事  
るを法院とて入集を換刻す言まき  
て二月に雙駒し刻を徳持寺の傍  
と云ふ事のつら集るもしし所増  
相成板と稱するお刻の法院とてん  
皆ま正而刻也此板を徳持寺の傍  
しあきし替る事多し三井  
と徳持寺しこととあきしはあつた  
あきつたまもあきしあきし

梅名

あきつたまもあきしあきし  
井家うねるも山年女のあきつた  
しあきつたあきしあきつた  
田しあきつた

○梅名の流に正而刻ハ  
吉徳公の廟地字七を徳持寺とてん  
古徳正而刻を徳持寺し由ある  
と正徳とて徳持寺のあきつた  
一而あきつた徳持寺しとて徳持寺  
のまきつたあきつた梅持寺  
徳持寺のものを一徳持寺し徳持寺

石に泥をよそぎしうらみのききもるもき  
里く正音のうと持ゆる於校刻しき  
ともこんもきくもやまありしうらみ満却  
のききあり刻の型は打ちたるうらみと  
鑑あつうらみともよめま音の四海を口  
本を代のそんがごとくハツヤリと似針  
しそきし日本の古研のゆ代と保  
其の体あり似合うるをともあらんは  
古伯公廟中の研き唐の研うもり  
本の古研を唐研と別とありはこ  
とも自らあめりてきくうらみといつ

本をこしうらみ一筋をんことを期しこ  
あきりけきとて供うらみとま(三月三  
十日)  
○此の古研を抜の校を湯原え一を白  
と部としあつる五國を今とてそと三  
信の強うらみ強うらみ起りて清えをう  
らみとそらなりうらみとあはれはこえ  
日以音を音我ひあはれはこえは後の  
のすもよめりあはれはこえはけ  
が、その強うらみとあはれはこえは  
あええのうらみとあはれはこえは

何れもあつた感う打たれた  
 ○此の國を平定したる人が年々多し何部  
 土著人もあつたといふ六千一都一土著人も  
 其の由三千一といふ外四く行くといふ  
 きりりり後者が割合に少くはる  
 (此一冊二冊五十枚の巻後といふ)  
 客がうらやまも外人うらやまも術を考へ  
 脱しつゝ状況の一端を告ぐる事  
 との出来れば

東洋書

古の事と新の事とを  
 概を考へしに念うるを梅  
 林と拾ひ印材とを  
 刻しを以て今より始る後  
 文館も印譜の中一冊  
 一冊と云ふは作古の譜  
 の印を撰りし事を見  
 とする也



贈田震卿

震卿嗜酒而長史字大日本地名辭書凡千  
二百萬言、閱十二年而成稿本今在早稻田大  
圖書館、高一丈五尺有奇、古今大著莫之過  
也、田半迄為刻一千二百萬言酒年成印以  
贈、余乃作長歌添之

一千二百萬言酒中成、藝林多說田震卿想  
見四千六百八十日、日之引至不停筆、仙才未  
慕青蓮傳、肉覽縱此太史抱、金匱石室  
破萬卷、山三足舜帝、銀槩流、脚跟歷八  
洲地、胸中昭、千古事、山川能說真大夫

徵諸目驗考同異、鴻荒世界山海經太平  
風土案字記、囊天括地無不有、典該室翅  
鄭虔化、忽傳湖海上、歛雨聲名揚、喧通  
洛陽市、紙價百倍昂、我與震卿素有的  
聞之、敬為喜、立欲仆、傾囊沽取數大樽、去  
就君家為君壽、垂輝十有二、羊春、斑回  
鄰、江矣、足於、為斟、千斛、第、解、酒、若  
書、誰、敢、等、君、身、

末四句、一作、盆中、千斛、萬斛、春、十萬  
年、無、匹、倫、若、書、一、丈、五、尺、米、汁、佛、子  
乃、等、身、未、知、孰、是、雙、存、以、候、取、捨

















を思し〜肉を(○×チやく〜) 鉄けあし 控  
し 羊ん付 巻を七きり〜 日 味あるを  
成しぬ(四月七日)  
○天てきりの物色(月)帝國 同より 控〜 三きり  
リ 初めをの 流 巻をの 控 控 控 控  
又の 又の 又の 又の 又の 又の 又の  
控 控 控 控 控 控 控  
か〜の〜の 控 控 控 控 控 控 控  
を ぬきと 巻をぬき

郵送の控

村の河の 保 控の 控 控 控



海し〜の〜

海し〜の〜

八冊を二冊にきり〜 控 控 控 控 控  
〜の〜の 控 控 控 控 控  
〜の〜の 控 控 控 控 控  
の 由〜の〜の 控 控 控 控 控

海し〜の〜

二冊に九冊に 控 控 控 控 控

海し〜の〜

元和元年の控

江戸文書の〜の〜の〜

お報す

元亨市池

このまき青地あるもなまの人の足跡  
のくろもりのちまきあふ池し三葉し  
大印の者の由らと好田志心あ  
報せしこの世保し 懐走ふの扶  
料ふまきまき

地のかきおれた節の品を平能保も  
くう口人の保ふ保る 書海津保も  
も保るうたに 若る若の保るも  
の保る書海津保も

